

病院経営に貢献できる臨床検査部門のあり方 —TRL方式による自主運営検査室への切り替え—

医療法人社団誠馨会新東京病院臨床検査部副部長

石橋みどり

現代医療にとって臨床検査は、疾患の診断や経過観察、さらには予防医療の重視にシフトする昨今において、健診になくてはならないものです。

2020年にはじまった新型コロナウイルス感染症では社会全体がPCR検査、コロナ抗原・抗体検査を経験しました。当時の安倍晋三首相が20年4月7日の記者会見で、新型コロナウイルス感染症対策に関して「国民を代表し、臨床検査技師への感謝と敬意」を述べ

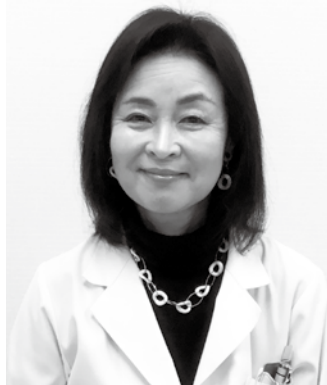
たことを思い出します。

これは、現場で奮闘する臨床検査技師の重要性と負担の大きさに対する理解と謝意を示したもので、臨床検査技師たちの間でも大きな反響を呼びました。

しかし、医療職のなかで医師、看護師の社会的知名度がほぼ100%であるのに対して臨床検査技師は30%に及ばず、依然として「縁の下力持ち」で知名度が低いのが現状です。しかし、間違いなく臨床検査技師は医療を支える重要

な専門職であると言えます。

医療を取り巻く環境は複雑化しており、それが病院経営に大きな影響を与えています。その結果、各部門における新たな役割と価値の創造が求められ、これは臨床検査部門も例外ではありません。臨床検査は医療の質と経営効率の双方に直結する部門ですが、400〜500床の中規模市中病院における病院収支では、臨床検査部門の占める割合はおよそ5%と云われています。



いしばし・みどり ●1970年、東京理科大学薬学部卒業。慶應義塾大学病院中央臨床検査部入職。99年、スクリプス研究所短期研修。2013年、医療法人社団誠馨会新東京病院臨床検査室部長就任。23年、聖徳大学看護学部兼任講師、24年、医療法人社団誠馨会新東京病院臨床検査室副部長就任